

令和3年度 兵庫県立北条高等学校 学校評価評価項目

領域	評価の観点	評価項目	実践目標	評価A	評価B	評価C	評価D	学校評価	部署	令和3年度の反省と改善策（自己分析）	関係者評価	学校関係者評価（外部分析）
学校運営	勤務時間の適正化	1 職員の勤務時間の適正化	毎週月曜日を「定時退勤日」「ノー会議デー」とし、平日1回、週休日1回の「ノー部活デー」を実施し、職員の勤務時間の適正化を図る。	「定時退勤日」に75%以上の職員が定時退勤に勤め、「ノー会議デー」が実施できた。	「定時退勤日」に50%以上の職員が定時退勤に勤め、「ノー会議デー」がほぼ実施できた。	「定時退勤日」に30%以上の職員が定時退勤に勤め、「ノー会議デー」がだいたい実施できた。	「定時退勤日」の職員の定時退勤が30%未満で、「ノー会議デー」が実施できないことも多かった。部活動も「ノー部活デー」の完全実施は半分未満であった。	C	管理職	今年度もコロナの影響が続いた。定時退勤については、特に意識なくとも達成された。ノー部活デーについては、新型コロナ感染症拡大により、部活動の制限がかなり、ほぼ、達成することができた。	B	・P D C Aを回すために、評価の改善が必要であると考えます。 ・イレギュラーが続くが、継続的な取組が必要である。
		2 会議の内容精選と時間厳守	会議には事前に資料を配布し、要点を絞って提案し、緊急を要する場合を除いて、原則1時間以内を守る。	資料を事前に配布するとともに内容を精選し、会議時間1時間以内が9割以上守られた。	資料の事前配布をほぼ実施し、内容もほぼ精選し、会議時間1時間以内が7割以上守られた。	資料の事前配布を半分以上実施でき、会議時間1時間以内が5割以上守られた。	資料の事前配布は半分以下で、会議時間1時間以内が守られたのは5割未満しかなかった。	C	管理職	昨年度に引き続き、行事の縮小などを検討する必要があり、会議時間はほとんど1時間以上かかった。一方、職員朝礼では、共有フォルダに連絡事項を事前に入力することで打ち合わせ時間が短縮され、学年打ち合わせ時間も十分に確保され、効率的に朝礼を運営できた。	B	・I C T機器の活用により、時間短縮が進んでいると推察される。 ・コロナ禍のため、十分に出来なかったのではないかとと思う。
		3 教材等の整理整頓	整理整頓が必要な箇所をピックアップし、種類や使用頻度別に分類・整理を実施する。職員の清掃分担を徹底し、コピー用紙の整理・再利用を促進する。	整理整頓が十分に行われておりコピー用紙の整理・再利用も完全に実施できた。職員の清掃分担も完全に実施できた。	整理整頓がほぼ行われておりコピー用紙の整理・再利用もほぼ実施できた。職員の清掃分担もほぼ実施できた。	整理整頓が行われているのが半数程度であり、コピー用紙の整理・再利用も不十分であった。職員の清掃分担も半数程度は実施できた。	整理整頓が行われているのが半数以下であり、コピー用紙の整理・再利用も不十分であった。職員の清掃分担も半数以下しか実施できなかった。	B	管理職	部活動の時間短縮などがあったため、教員には整理整頓する時間が確保された。また、教材研究とともに教材室、理科実験室などの整理ができた。継続して机上、教材室の整理ができた。	B	・生徒の学習環境に関わることでもあるため、継続して取り組んで欲しい。
	地域に信頼される学校づくり	4 家庭や地域への情報発信	学校・家庭・地域との相互関係を深め、中学校・PTA・同窓会・後援会と密接に関わり地域に信頼される学校づくりに邁進する。そのために学校通信、学校案内・ホームページを充実させ、学校の教育活動を保護者や地域の人々に積極的に広報していく。また、各部、各学年と連携をとり、各行事や式典を意義深いものとする。	学校通信を年間10回以上発行し、生徒・保護者、市内等中学生に配布し情報発信できた。また、ホームページの更新もこまめにできた。	学校通信を8回以上発行できた。	学校通信を6回以上発行できた。	学校通信を5回以下しか発行できなかった。	C	総務・ICT推進	学校案内、HPの充実は今年度の目標は達成された。ただ、新型コロナウイルスの影響を受けて、始業式など、全校生参加の行事が放送で実施というケースが中心となり、従来通りの行事が円滑に行われなかった。密を回避するためにやむをえない状況であった。オープンハイスクールについては、感染防止策をとった上で、2回とも実施でき、中学校への情報発信ができたことは一つの成果であり、その結果、コースの志願者が定員を超えることにつながった。その他、多くの行事は縮小となりながらも、実施できたのは本校の全職員の協働意識のたまものである。講演会についても、コロナの状況に鑑みて中止となったものがあるが、地域に信頼される学校として、次年度は行事、式典等を全校一同に会した場で実施できる工夫を検討していきたい。	B	・校長ブログの内容が、地域からもとても親しみもてる内容であるため、学校の良いイメージを発信していると考えられる。
		5 地域との交流	高校生ふるさと貢献活動を実施するため、ボランティア活動への参加や関連機関との連携を図る。また、PTAと連携した行事を推進するとともに校内行事や学校安全を守る取り組みを盛り上げる。	年間延べ750人以上の生徒が活動に携わった。さらに、生徒が主体的に取り組み、内容の充実や地域との連携を深めることができた。	年間延べ500人以上750人未満の生徒が活動に携わった。	年間延べ250人以上500人未満の生徒が活動に携わった。	年間延べ250名未満の生徒しか活動に携わらなかった。	C	生徒指導	今年度も新型コロナウイルスの感染症の影響を受けて、校外活動を積極的に行うことができなかった。しかし、募集のあるボランティアには生徒が積極的に希望する姿が見られたので、地域に貢献できる生徒の育成や生徒の人格を伸ばす取組になると確信している。	B	・コロナの状況において、この生徒アンケートの結果は十分であると考えられる。

令和3年度 兵庫県立北条高等学校 学校評価評価項目

領域	評価の観点	評価項目	実践目標	評価A	評価B	評価C	評価D	学校評価	部署	令和3年度の反省と改善策（自己分析）	関係者評価	学校関係者評価（外部分析）
学校運営	教員の資質向上	6 教員の授業力向上	授業研究の機会を増やし、「主体的・対話的で深い学び」と「言語活動」の研究を通して教員の授業力の向上を図る。	年間3回（各学期に1回）の授業研究の機会を設け、言語活動についての研究を進める中で、教員の授業力向上を図ることができた。	年間2回の授業研究の機会を設け、言語活動についての研究を進める中で、教員の授業力向上を図ることができた。	年間1回の授業研究の機会を設け、言語活動についての研究を進める中で、教員の授業力向上を図ることができた。	授業研究の機会を設けることができなかった。	A	教務	昨年度休校で実施できなかった1学期の授業研究は、教員が相互授業見学をおこなう「授業見学週間」として実施できた。また、例年通り2学期に公開研究授業、3学期に校内研究授業を実施し、その成果を報告して全体に共有できた。アンケート結果も全体的には良好だが、新指導要領が求める「生徒が主体的に参加する授業」については改善の余地が大いにあると考える。	A	・相互授業見学が出来たことは大変意義深い。今後も生徒の学習の可能性を
			8時20分登校の遅刻件数を減少させる。（昨年度475件）また、挨拶の励行を促進するとともに、毎月の頭髪服装点検で身なりを正す。	年間遅刻件数は210件未満であり、登下校時やすれ違う時にはしっかりと挨拶ができた。また、時と場合に応じて身なりを正すことができた。	年間遅刻件数は211件以上420件未満であり、登下校時やすれ違う時にはしっかりと挨拶ができた。また、制服の着崩しがないよう注意喚起に努め、校内では身なりを正すことができた。	年間遅刻件数は421件以上630件未満であり、挨拶の声は少なかつた。頭髪服装点検では再点検者が増加傾向を示した。	年間遅刻件数は631件以上であり、改善がみられなかつた。そして、挨拶が目立った。			令和元年度の遅刻件数を基準値に設定し、目標を数値化して、取組を継続している。今後も根本的な登校指導の在り方の見直しや、生徒の安全を守るための啓発運動に注力していく。また、日々の声かけや遅刻回数が多い生徒には面談を行い、詳細な情報を全校集会で公表しているが、時間や交通ルールを守る意識が低い生徒が一定数いることが現状である。		・一朝一夕には成果はあげられないだろうが、継続して指導をして欲しい。
	生徒指導	8 規定及び内規の整理と共通理解	学校の実情を考慮しながら未来志向で整理を進める。	生徒指導規定及び内規を現状に応じた改訂・修正をすることができた。	見直した内容を部会等で検討するまでにとどまった。	部内で現行規定及び内規を整理した。	整理することができなかった。	A	生徒指導	今年度は制服のジェンダーレス化やBYODに対応すべく、規定や内規の改訂・修正をすることができた。今後も生徒が主体になって規定や内規を見直していけるよう心掛け、より良くなっていけるよう変革を目指す。	A	・生徒主体で、規定を見直す目標設定が素晴らしい。
			交通安全の遵守やマナーの向上をはじめ、校内施設・設備の安全点検や定期的な清掃などに努める。また、専門機関（加西警察や加西市補導委員会等）との連携も積極的にとり、情報交換を行う。	日々の指導や講演会等の行事を見直し、生徒の状況把握や対応が適切にできた。	学校安全に係る情報を全職員へ周知し、共通理解を図りながら、各部・学年と連携した対応ができた。	学校安全に係る情報を全職員に周知するまでにとどまった。	学校安全に係る事案に適切な対応ができなかった。			今年度は兵庫県警察本部より講師を招き、ネットに関する講演会を実施することができた。また、交通安全については入学直後に講話を行い、以降は注意喚起や啓発活動に努めた。校内施設・設備については定期的に点検及び美化活動に努めることができた。		・講演会の内容も、生徒を取り巻く状況をよく把握したものとなっており、効果的だと考える。
	進路指導	10 職業観・勤労観の育成と進路意識の向上	インターンシップ、大学見学会、職場見学会などを充実させ、社会の中での自己の役割を考えさせる中で職業観・勤労観を育成し、進路意識を向上させる。	インターンシップ、職場見学会等を希望する生徒全員が参加できた。大学見学、講演会、キャリアガイダンス等を企画し、進路意識向上への支援に十分つながった。	インターンシップ、職場見学会等を希望する生徒のほとんどが参加できた。大学見学、講演会、キャリアガイダンス等を企画し、進路意識向上への支援につながった。	インターンシップ、職場見学会等を実施した。大学見学、講演会、キャリアガイダンス等を企画した。	インターンシップ、職場見学会等を実施できなかった。	B	進路指導	コロナ禍の影響によりインターンシップ（病院、保育所、学童等の体験）がほとんどできなかった。大学見学や企業説明会も中止せざるを得ない状況となった。そのような状況の中、職業観や勤労観を十分に向上させたとは言えない。感染症等の影響が今後も続くようであれば、根本から計画を見直し、コロナ禍においても実施可能な計画を企画することも検討する必要がある。	B	・様々な苦労があったと思われるが、一定程度の生徒アンケートがあるため、評価は低くないと考える。
			11 進路実現に向けたサポート体制の確立	生徒個々の進路希望に応じた補習や個別指導、進路ガイダンスを充実させ、意欲を持った生徒の学びを支援する。全教員の負担が増えてきているのでそれを軽減するように努力する。	全学年において、進路講演会、ガイダンス、進路面談を計画通り実施できた。また、平日補習・夏季補習等を積極的・計画的に実施し、学力支援が十分できた。個々の生徒の進路に応じた支援ができた。教師の仕事がかなり軽減することができた。	全学年において、進路講演会、ガイダンス、進路面談を計画通り実施できた。また、平日補習・夏季補習等を積極的・計画的に実施し、学力支援ができた。教師の仕事がわずかに軽減することができた。	進路講演会、ガイダンス、進路面談を実施した。また、平日補習・夏季補習等を積極的・計画的に実施した。教師の仕事がわずかに軽減することができた。			進路講演会、ガイダンス、進路面談を一部に実施、またはできなかった。平日補習・夏季補習等を積極的・計画的に実施できなかった。教師の仕事が軽減することができなかった。		補習や進路に対する個別指導は例年どおり、もしくはそれ以上の回数を実施することができたが、全体への進路ガイダンスは十分に実施することができなかった。感染症等が今後も続くようであればガイダンス等のあり方を検討する必要がある。

令和3年度 兵庫県立北条高等学校 学校評価評価項目

領域	評価の視点	評価項目	実践目標	評価A	評価B	評価C	評価D	学校評価	部署	令和3年度の反省と改善策（自己分析）	関係者評価	学校関係者評価（外部分析）
教育課程	カリキュラムマネジメント	12	12 グラントデザインに基づく教育	「北高カリキュラム2021」（全体構想）に基づいた教育の展開を呼びかける。 年度当初にグラントデザインを全教員に配布し、生徒の資質・能力の育成を主眼とする教育を展開することを共有できた。 今年度のテーマである「言語活動の充実」について、全教員で言語活動を実践することができた。	年度当初にグラントデザインを全教員に配布し、生徒の資質・能力の育成を主眼とする教育を展開することを共有できた。 今年度の今年度のテーマである「言語活動の充実」について、多くの教員で言語活動を実践することができた。	年度当初にグラントデザインを全教員に配布し、生徒の資質・能力の育成を主眼とする教育を展開することを共有できた。 今年度の今年度のテーマである「言語活動の充実」について、半数程度の教員で言語活動を実践することができた。	年度当初にグラントデザインを全教員に配布し、生徒の資質・能力の育成を主眼とする教育を展開することを共有できた。 今年度の今年度のテーマである「言語活動の充実」について、一部の教員でしか言語活動を実践できなかった。	B	教務	全教員にグラントデザインを配布して情報の共有はできた。教員アンケートでは84%が「できた」以上（「よくできた」の割合は19%）で、昨年度に比較して上昇したが、以前「よくできた」の割合が低いことが気になる。 言語活動の充実については生徒アンケートでは40%が授業の工夫をしていると感じている（「まあそう思う」以上なら93%）。この割合をさらに増やすような仕掛けが求められる。	B	・職員、生徒全体にグラントデザインを共有するためには、それぞれ校内研修や生徒への周知の場を設定するなど、工夫が必要と考える。
		13	13 授業のPDCAサイクルの展開	シラバス・年間計画、生徒授業アンケート等を活用し、授業のPDCAサイクルを展開させる。 1学期末、2学期末に生徒授業アンケートを実施し、分析の上で授業改善について検討できた。 3学期末に1年間を振り返り、年度当初に作成した年間計画を改善するとともに、改善案を次年度の担当者に引き継ぐことができた。	年間2回の生徒授業アンケートを実施し、分析の上で授業改善について検討できた。 3学期末に1年間を振り返り、年度当初に作成した年間計画を改善するとともに、改善案を次年度の担当者に引き継ぐことができた。	生徒授業アンケートを実施できなかったが、3学期末に1年間を振り返り、年度当初に作成した年間計画を改善するとともに、改善案を次年度の担当者に引き継ぐことができた。	授業のPDCAサイクルを展開することができなかった。	B	教務	実施についてはA評価に該当するが、内容を総合してB評価とした。授業アンケートの結果を授業に良く反映できたと回答したのは8%に留まった（「できた」を含めると84%）。生徒アンケートでは29%が反映されていると感じている（「まあそう思う」以上なら82%）。 生徒の声を授業改善にいかすことは重要であるが、一方で学校や教員の目標・思いを反映させることも必要である。授業改善の視点としてアンケート以外のものも用意していく必要を感じている。	A	・積極的にPDCAサイクルを回そうと努力しており、生徒の学習活動への還元が期待される。
		14	14 教育課程やカリキュラムの検討	学校教育目標を達成するための効果的な教育課程やカリキュラムについて検討する。 令和4年度実施教育課程について、学校教育目標を達成するという目標を共有した上で、教育課程を編成することができた。	令和4年度実施教育課程について、学校教育目標を達成するという目標をおおむね共有した上で、教育課程を編成することができた。	令和4年度実施教育課程について、学校教育目標を達成するという目標をおおむね共有した上で、教育課程を編成することができた。	令和4年度実施教育課程について、学校教育目標を達成するという目標を共有できなかった。	D	教務	教育課程編成の議論に教育目標の実現という視点はなく、受験のために必要な教育課程についての議論にとどまった。まずは本校が目指すべき方向性やビジョンを確立することが望まれるが、教務部だけに留まらない学校全体としての課題である。アンケートの結果は悪いものではないが、私個人の実感とはかけ離れたものに感じる。	C	・教務部だけでなく、教員全体で、新教育課程や学校のグラントデザインに対する理解と実践を進めていく必要がある。
			新教育課程となる令和4年度入学生の教育課程について検討する。 令和4年度入学生教育課程について、新学習指導要領が目指す教育の内容をよく共有し、全職員で教育課程について検討することができた。	令和4年度入学生教育課程について、新学習指導要領が目指す教育の内容をおおむね共有し、全職員で教育課程について検討することができた。	令和4年度入学生教育課程について、新学習指導要領が目指す教育の内容をおおむね共有し、全職員で教育課程について検討することができた。	令和4年度入学生教育課程について、一部の教員でしか検討することができなかった。	C	教務	「新学習指導要領が目指す教育」「これからの時代に求められている教育」を土台とした検討はできず、現行教育課程編成と同じ状況であった。良くも悪くも「これまで通り」である。編成過程については各教科の意見を吸い上げながら調整できた。 上の項目にも関係するが、本校には教育課程を評価する機会がない。より良い教育課程を編成するためには、教育課程全体においてもPDCAサイクルを展開できるような手立てが必要ではないかと思う。	C	・教育課程を評価する場や機関が求められる。 ・学校全体として議論をして欲しい。	

令和3年度 兵庫県立北条高等学校 学校評価評価項目

領域	評価の観点	評価項目	実践目標	評価A	評価B	評価C	評価D	学校評価	部署	令和3年度の反省と改善策（自己分析）	関係者評価	学校関係者評価（外部分析）
課題学習	人権教育	15人権教育への取り組み	人権HRを活性化して生徒の人権意識を高める指導を推進する。また、最近注目されるようになった人権課題についても、人権HRを通して認識を深める。	人権HRが充実してかなり多くの生徒の人権意識が高まるとともに、人権問題に対する関心も高くなった。	人権HRが充実して多くの生徒の人権意識が高まるとともに、人権問題に対する関心も高くなった。	人権HRが充実して五割程度の生徒の人権意識が高まるとともに、人権問題に対する関心も高くなった。	人権HRが充実して生徒の人権意識が高まるところまで至っておらず、人権問題に対する関心も高くはならなかった。	B	人権	休業の影響で十分に時間を確保することはできなかったが、各学年と連携し、ほぼ年間計画にそって進めることができた。訪問指導では車椅子体験を実施し、障がいをもつ人の気持ちに寄り添う時間を生徒に持たせることができた。加西市とも連携をとり人権教育を推進していきたい。	B	・とても大切な部署であると思うので、職員、生徒への働きかけを継続して欲しい。
	人間創造コース	16人間創造コースの充実	人間創造コースの特色ある取組を通して、体験活動を充実させるとともに、主体的に課題解決に取り組む姿勢を身につけさせる。また、地域に根ざした活動を通して、生徒にふるさとを愛する気持ちを育み、ふるさと貢献活動を積極的に行う。加えて、人間創造コースの魅力・特色を充実させる教育内容を取り入れ、生徒が活動を通して、人間力や、コミュニケーション能力、グローバル時代を生きるための英語力を向上させられるような取り組みを行う。	特別非常勤講師などを積極的に活用し、特色ある取組を実施し、体験活動も非常に充実させることができた。また、探究活動を通じて、地域に根ざしたボランティア活動等にも積極的に取り組むことができた。上記に加えて、キャリアガイダンスを年に2回行うことで、生徒の自己肯定感を高め、将来を前向きに考えるきっかけを与えられた。英語力が向上し、英検GTEC等の点数も向上した。	特別非常勤講師などを活用した特色ある取組を実施し、体験活動や、地域に根ざした活動も実施できた。また、ボランティア活動にも複数回生徒が参加した。英語力も向上し、英語検定やGTEC等公式テストのスコアが前回より少しアップした。	特別非常勤講師などを活用した特色ある授業を1回は実施できた。また、地域に根ざした活動も1回程度は行うことができた。英語力は前回同様のスコアを維持できた。	特別非常勤講師の活用ができず、人間創造コースの特色を活かす授業等を実施できなかった。また、地域に根ざした活動も行うことが出来なかった。英語力も検定合格等の数字が伸びず、英検合格者数等も減少した。	A	コース委員会	新型コロナウイルス感染拡大のため、体験活動等が制約され、コース独自の取組である、JAXA東京研修や、京大見学が出来なかったが、それに変わるローカルな活動を充実させ、主体的に課題解決に取り組む姿勢を身につけさせることができた。特に、地域に根ざした活動として、今年度、「うずらのおもてなしツアー」が新たに計画され、高校生が取り組むまちづくりを実施することができた。他にも、加西のお土産考案企画や、地域のこども達とふれあう「森の図書室」などにも参加し、生徒にふるさとを愛する気持ちを育むことができた。また、オーストラリア訪問は叶わなかったが、「ねむめカレッジ」との交流により、加西在住の外国人のゲストを呼び、「世界の扉in 北条高校」と題して、異文化を学ぶ機会も持つことが出来た。普段から、日本語教室で関わることも多く、加西在住の外国人支援にも積極的に関わることができた。人間創造コースの活動の多くが、地元加西市において、大きな役割を果たし、彼らの存在、働きぶりが必要不可欠なものになってきている。今後もさらに、生徒のスキルアップを目指し、特別非常勤講師等による学習の機会を確保して行きたい。また、オンラインによるキャリアガイダンスも定番となってきたが、今回はコースの2・3期生がゲストとして参加してくれるなど、実りある将来に向けての話し合いの機会を合計4回持つことができた。まもなく、4期生による探究論文「学びの軌跡 vol.4」にて、これらの新たな活動も報告される予定である。3月実施予定の5期生による「探究活動発表会」は、4月に日程を変更し、校内で、新入生や新着任の先生方を前に開催する予定である。今後も益々活発な活動を展開し、地域に若い力を役立てたい。	B	・コースの先輩がゲストとして在校生に話をする取組は素晴らしい。 ・コースに関わるHPの更新を進めて欲しい。
	国際理解教育	17国際交流事業の推進	交流事業を組織的に推進し、国際理解を深め、広い視野を持った生徒を育てる。コロナ禍のため、令和2年度に行ったオンラインを活用した国際交流の取組をさらに推進する。また、学校行事の中で、国際交流事業の成果を全校生徒に還元していく。	タイ王国、オーストラリアとの国際交流を行ない、交流の成果を全校生徒を対象とした成果発表会を実施し、タイ王国、オーストラリア生徒の受け入れにおいて、全校生との交流活動が十分にできた。	タイ王国、オーストラリアとの国際交流を積極的に行ったが、全校生徒に対する成果の還元ができていなかった。	タイ王国、オーストラリアとの国際交流を積極的に行ったが、全校生徒に対する成果の還元ができていなかった。	タイ王国、オーストラリアとの国際交流を前年以上に積極的に行えなかった。また、全校生徒に対して成果の還元が不十分であった。	D	国際交流	前年度のオンラインでの国際交流をさらに発展させて、学校行事としてではなく、通常授業の中で交流ができるように検討したが、先方の担当教員の体調不良のため、交流が滞った。一方、本校生徒の国際交流版画、交流のために手作りカルタを作成した。事前にクリスマスワンカレッジの日本語教室の生徒に送付し、カルタの読み札を活用して日本語を学んでもらい、オンラインで実際にカルタ大会を行う予定である。次年度以降、先方に英語版のカルタの作成を依頼し、本校生徒の英語力、コミュニケーション力の向上を図る取組を検討する。	D	・評価基準に照らして評価すると低い表とになってしまうが、取組としては十分に行っている戸考える。